
ドッペルゲンガー

夢月みぞれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドッペルゲンガー

【Nコード】

N4516L

【作者名】

夢月みぞれ

【あらすじ】

歩行が不可能な女子。

脚に原因不明の痛みを訴える女子。

二人はお互いに「歩」と言う名前を持っている。

「アユミ」と「アユム」の二人は一体何故、”脚”に異常をきたしているのだろうか？

怪奇モノの短編小説です。

わたしは良く夢を見る。

学校に行っている夢、友達と遊ぶ夢、お買い物をしている夢――
――それらは全て私生活のことで、空を飛んだりとか怪物に出会うなどの非日常的な夢は一度として見たことが無い。

友人が言うには、夢と言うものは自分の願望を映し出しているのだとか。

それならば一度として空想世界のような出来事を夢見れていないわたしの心の中には、そういった願望が一切無いということになる。けれどそれは変だ。

わたしはこんなにも『歩く』と言う願望を抱いている。

生まれつき足の不自由だったわたしに、歩行の自由など無かった。だから物心がついた頃からずっと、人並みに歩きたいと願ってきたのだ。

それなのにその願望が『夢』に映し出されないのは、まったくもって遺憾である。

わたしはこんなにも恋焦がれていると言うのに――――。

「はあ……」

時刻は午後十時半。

もうすぐ今日も睡眠の時間がやってくる。

読みかけの本を閉じて寝る準備を始めるとする。

今日こそは歩く夢が見られますように、と強く念じながら。

~~~~ドッペルゲンガー~~~~

両足の痛みを堪えながら、私は暗く沈鬱な夢から帰還した。

「いっ……っ」

覚醒した神経は真っ先に足に走る痛みを捕らえ、次いで周囲の音を拾った。

すぐ近くでスズメが鳴いている——それも、限りなく愉快そうに。

こっちはまるで足が潰れてしまったかのような激しい痛み顔に顔をしかめているというのに、朝を告げるスズメたちの鳴き声はどこまでも楽しげだ。

お前たちはそんなにも、私が苦しんでいる姿が面白おかしく見えるのか？

湧き上がってくる殺意。

しかしそれは、

「いった……」

それを上回る痛みによって打ち消された。

ズキン、ズキンと押し寄せてくる痛みの波。

私は恐る恐る寝巻きのズボンの裾をめくってみた。

——現れる、白い肌。

そこには一切の汚れも痣も無い。

ただ、見慣れた自分の白い肌があるのみだ。

外傷はどこにもなく、内出血のような内側の傷もない。

それにも関わらず痛みは脈動しながら私の神経を汚染してくる。

痛い——痛くて涙が出てきてしまう。

「もうヤダ……」

ぼろりとこぼれてきた本音。

もう十年は付き合っている、この不可思議な痛みは、いまだに原因不明である。

神経科の医者に見せてもお手上げ、脳外科の医者に見せてもお手上げ、精神科も血管科も内科も全部が全部お手上げだ——！！

「、、っ」

ベッドの上に置かれていた置時計を手にし、壊れるくらいの握力を込めて振りかぶる。

狙うは目線の先、何も無い壁。

真っ白な生地にすすの原がプリントされた壁紙が張ってあるだけのその壁に、私は憎しみを込めて時計を投げつけた。

——ガシャン、と金属が弾ける音がした。

そんなの当たり前だ、何せ全力で置時計を投げたのだ。

壁にぶつかれば粉碎されるのは火を見るより明らかなこと。

こんな中国製の安物なんかが耐えられるわけがない。

そもそも時計はこのような用途で設計されているわけではないので、M A D E I N が変わったところで結果が変わることはないだろうけれど。

「ちょっと歩<sup>あゆみ</sup>? 今の音なに？」

「なんでもない！」

ドアの向こう側から、義母の甲高い声が私のプライベートルームに侵入してきた。

この世で私のもっとも嫌いな声の一つでもある。

義母というのは、まあその名の通りで、ぶっちゃけ私は拾い娘らしい。

自分ではよく覚えていないものの、孤児院のような施設に入っていたらしく、十六にもなった今でも、たまにその職員の人が家に来ては私の様子にさぐりを入れているのだ。

その職員さんの話によると、私はクリスマスの日に施設の前で捨てられていたのだとか。

だから私の誕生日は十二月二十五日で、その拾われた日が私の一歳の誕生日だったといえる。

そんな不遇の私を引き取ってくれた里親が今の両親だった。

人当たりが良くて二人とも仕事を持っている。

子供が欲しくてずっと頑張っていたらしいのだが、里親制度なるものを知り、子供を作るのを諦めて私を引き取ったそうなの。

ここまでの部分を聞くとイイ話に聞こえるんだけど、実情はもうちょっと入り組んでいて、子供が欲しくてたまらなかったのは義父の方だけで義母はあんまりその気がなかったらしい。

だから里子を探そうと躍起になっていたのも義父だけで、義母はずっとその間も仕事に没頭していた。

まあどこぞの馬の骨とも知れぬ赤の他人の子供を引き取るのだ、義母の態度の方が正常だ。

私が義母と同じ立場なら、絶対とは言わずとも進んで引き取ろうだなんて思わない。

そんな性格の一致というか考え方の一致から、私と義母は互いに忌むべき存在となっていた。

義母は他人への警戒心と子供を生めなかった自分への嫉妬心から私を忌み嫌い、

私はそんな義母の心を覗き、また、生理的に受け付けられない声を発声させる張本人ということに忌み嫌った。

こんな状態で円満な家庭関係など築けるはずもなく、見た目は温かなこの家庭も、内側はとくにヒビだらけで崩れ落ちそうだ。

そして――――義母が私を嫌っている最大の理由が、コレだ。

「なんでもないわけじゃないでしょう？　こら、早く鍵を開けなさい！」  
「絶対イヤ！」

私は駄々を捏ねる幼児のように大声を上げて義母の進入を拒絶した。

どうせ部屋に入ってきて、壊れた時計を見てヒステリックを起すだけだ。

そんなことのために、私が持っている唯一の自分だけの空間を汚されたくは無い。

だから義母が諦めてリビングに戻るまで、私は布団を頭から被って耳をふさぐことにした。

義母の声を聞くとどうしようもないほど不愉快になってしまふし、ヒステリックを聞くのも見るのも、もう限界である。

この十年近くも我慢してこれたのが奇蹟だろう。

生理的に無理なものを慣れろと言う方が酷なのだし。

しばらくして、義母の気配が消えた。

静まり返る部屋が私を包んでいる。

義母が私を嫌っている一番の理由――それは、この原因不明の『足の病』のせいだ。

物心がつき始めた頃から、夢からの帰還後に足の痛みを発症するようになった。

しばらくすれば治まる痛みとはいえ、まるで足が潰れてしまった

かのようなあの激痛だけは、十年経った今でも慣れないし、苦しいモノなのだ。

そんな私の様相を見て、義母は大層戦慄したに違いない。現代で幽霊や非科学が信じられなくなってきたとはいえ、元来女は占いや風水などを信じやすい生物である。

私のこの非科学的な足の痛みを見て、義母は一体どう思ったのだろうか。

……鬼子だとも思った？

……呪われた娘だとも？

……災厄の種だと考えた？

真実は義母の胸のうちのみだが、それでも義母が私に愛情を注いでくれたことなどありはしない。

私を育てるのは義務であり、夫のためだと自分に言い聞かせながらの日々を送ってきたのではないか、と私は想像する。

それならいくら嫌でも、義務感からこなすしかない。

心にフィルターをかませることによって義母はこの十年の育児を行ってきたのだと思う。

そこから推察するに……まあ、ようするにそう言うことだ。

私は義母にとって最大の邪魔者であり、家庭を崩壊させる呪われた娘であり、病魔をうつす病原体なのだ。

仲良くしようと言う方がどだい無理な話である。

それでもなんだかんだでここまで育ててくれたことには大いに感謝しているし、恩返しもしたいと思っている。

けれど私の心はそこまで広くも強くも無い。

おかげさまで周りを傷つけながらも今もこうして生きながらえているのだけれど、この『痛み』だけは我慢出来ない。

苦痛だけれどどうしようもなく、でも甘えられる人もいなくて、ストレスばかりがたまって……。

それを毎日繰り返しているうちに、心に歯止めがかからなくなっ



てきてしまった。

今ではこうして物にさえあたる始末だし。

普段は偽善者ぶって愛想笑いを振りまいている私でも、いつもの時だけは心の奥底から参ってしまう。

それほどまでにこの現象は厄介なのだった。

「痛い……」

およそあと五分。

それで今日の分の痛みが終わる。

普通の時間ならたったのあと五分。

けれど今は。

……地獄のような五分だ。

☆★☆☆

車椅子の車輪を引くとき、いつも思っていることがある。

“歩く”という行為が出来ない私にとって、想像での“歩行”はとても気持ちの良いことだ。

車椅子の車輪は重く、毎度回すのも結構大変だ。

けれど自分の足で歩けるのなら、こんな手間は無い。

痛くもないし、疲れもしない。

それはなんて自由で快適なのだろうか。

この何でも出来る両手のように、蠟人形のようなこの二本の足も何か出来はしないか———そんなことばかり考えている。

「歩、学校いかないの？」

リビングからお母さんの心配そうな声が聞こえてきた。  
わたしは体を捻って車椅子から返事をする。

「今から行くよ」

そう、と笑顔でわたしを一瞥したあと、お母さんの姿はリビングへと消えていった。

「……………」

がちやり、と玄関の扉を開ける。

開かれた視界。

太陽光が目突き刺さって少し痛い。

我が家の玄関は、わたしの足が不自由なためにバリアフリーな造りになっている。

扉もスライド式のもので、ハンドルを倒すと開く。

その際に発生する『がちやり』という音は一般家庭のそれと大差ないんだけど、やっぱり普通の扉の方が『玄関』って感じがしてかっこいいのは確かだ。

階段もスロープ状になってるから、段差なんてものは無い。

これも造詣的にはあまりかっこよくはない。

かっこよさの問題じゃないとはお父さんの言葉だけれど、将来“家の設計者”になりたいわたしとしては、結構気になる部分なのだ。

それにしても、ちよつと苦笑してしまった。

私の名前は“来栖歩”だ。

この二本足は全く動かないというのに、歩という名前はどうかと思う。

両親は「だからこそ『あゆみ』じゃなく『あゆむ』にしたんだ」なんて言っていたけれど、いまだにその意味はよくわかっていない。どちらにせよ“歩く”と言う名前がついているのに歩けないのは、滑稽な感じがするのはわたしだけだろうか？

でも、わたしとしては歩けても歩けなくてもどっちでも良かったり。

だって歩けなくたって生きていけるし、建築士の資格はとれるし。これより先の人生で、足が動かないせいで凄く困ることなんてきつとないだろう。

「さあて行きますか」

今日も学校、明日も学校。

こんなことを考えていても明日はやってくるのだ。

それなら後ろ向きな考え方よりは前向きな考え方をしていた方が自分も楽だし、きっとこっちの方が周りも気を使わなくて済むだろう。

結構障害者の子供って拗ねちゃうみたいだけど、拗ねて両親を困らすのもどうかと思うし。

こうして人生を謳歌出来るだけでもありがたいと思わなきゃ。

ちなみに。

私の座右の銘は『命あつての物種』だ。

☆★☆☆

私は自分の名前が大嫌いだ。  
どうして仮の両親は私にこんな名前をつけたのだろうか。

「加瀬歩」

先生に呼ばれて返事をする。

HRでの点呼は、私の低い朝のテンションを更に下げるものだった。

アユミ、と聞くだけでイラついてしまう。

私は幼い頃からずっと毎朝両足が痛んでいる。

それを仮の両親も知っているだろうに、わざわざ歩なんて名前をつけるなんて……嫌がらせもいいところだ。

痛みは夢から帰還した朝だけで、寝なければ痛みも何もやってはこない。

だから登校する頃には全然歩けるし、生活で支障が出たことは一度としてない。

あの忌々しい夢を見た後にだけ、私の足は痛むのだ。

それにしても、足に関する名前は付けないのが人情と言うものはなかろうか。

こっちは自分の名前を聞くだけでもストレスを感じなくてはならなくなるのだから。

まあ———そんな考えは、あの小さな器のおば様にあるわけがないか。

くしわき みそら  
「櫛脇美空」

「はい」

——美空、だってさ。

なんていい名前だろう。

私の名前と取り替えてはくれないだろうか。

この際、アユミという呪わしい名前から逃れられるのなら、どんな名前だって構いはしない。

ただただ、足にまつわる名前だけがイヤなのだ。

わたなべきょうこ  
「渡辺京子」

「はい」

京子！

それもいい名前だ。

と言うか、このクラスで私より最悪な名前も、同じくらい嫌な名前もない。

みんながみんな私より良い名前だ。

だって誰一人として足にまつわる名前じゃないのだから。

ああ、早く大人にならないかな。

一人でも名前が変えられるようになったら、一分一秒を惜しんでも変えに行くのに。

「HRは以上だ。号令」

「起立！」

委員長の透き通った声が教室に響く。

私はそれをぼんやりと聞きながら、世界は一体いつになったら滅んでくれるのだろうか、という後ろ向きなことを頭の中でぼんやりと浮かべていた。

☆★☆☆

キィ、キィと車輪の軋む音がする。

夕焼けがとても綺麗だけれど、どこともなく寂しく感じてしまう。

誰もいない教室、微かなタバコの匂い、影に沈む私の足。

そのどれもが現実的ではない。

まるで誰かの世界を覗き込んでいるかのよう。

……だと言うのに、観測者たる私には痛覚も意識もちゃんとある。こうして手で頬を抓れば痛く感じるし、そもそも寂しいと思えていること自体が意識がある証拠だ。

それでも現実感が無さ過ぎて容認できない。

なのに、これは私の世界だと、自分自身が御身に言い聞かせている。

何ていう矛盾。

それでも夢は続いていく。

「どうしたの？ ■■■」

うまく聞き取れない声。

誰もいない教室なのに、どこからともなく声が聞こえてくる。

それが誰の声なんて知ったことではない。

ただ夕陽はどこまでも世界を焼き尽くしていて、私はその影に埋まって蹲っているだけだ。

「ほら、貴方は■■■よ。もう忘れちゃったの？」

そんなことはない。

それは私の名前だ。

自分の名前を忘れるはずが無い。

——そう、だ。

忘れるなんてそんなこと……。

「しょうがないなあ。なら私が■■してあげる」

……

……

……

「きつ、あああああ……っ!!?」

得体の知れない恐怖が背を駆け抜けていくようで気持ちが悪かった。

ぞくぞくとした悪寒が断続的にやってきては、私の身体を犯していく。

全身は汗にまみれ、まるで真夏の炎天下に放り出された時の発汗量だ。

喉はカラカラで痛みを伴うほどまでに干上がっていた。

「はっ、はっ……はーっ……」

乱れた呼吸を整え、私は額の汗を拭った。

……これで三日連続だ。

最近自分がおかしい。

毎日のように同じ夢に苦しめられている。

イメージがあまりにも不吉すぎて、風邪を引いているわけでもないのに悪寒が治まらない。

どうしてこんなことになってしまったのか、皆目検討もつかない。誰かに恨まれるようなことをした覚えは全然無いのだけれど。

「はぁ……」

落ち着いてきた心臓。

汗によってもたされた冷却効果で冷えた身体。

べたついた背中をふき取ることもせず、私は再びベッドへと身を預けた。

天井は私がこんなに苦しんでいても相変わらず白一色で統一されていて、不変を強調されているようで少しむっとした。

しかし——一体、私の身に何が起きたのだろうか。夢では毎回のように車椅子が現れる。

まるでそれが最も重要なことなのだ、と言わんばかりに。

「まったく……」

冷えた空気を肺に満たし、次いで覚醒してきた神経に通す。

一気に思考がクリアになった私は、壊れてしまった置時計の代わりに押入れから引っ張り出した壁掛け時計に目をやった。

大きな文字盤に刻まれた時間は四時三十分を少し過ぎたところだった。

外からもれてくる光は無く、まだ夜のように暗く静かだ。

「……………」

二度寝しようにも、完全に目覚めてしまったらなかなか寝付けろわけが無い。

仕方なく私はリビングへと移動することにした。

この部屋に冷蔵庫は無い。

カラッカラに乾いたこの喉を潤すには、冷蔵庫でよく冷えたお茶でも飲むのが一番だ。

私は両親を起こさないよう、忍び足で部屋を後にした。



「あー……生き返ったわ」

空になったコップをテーブルの上に置いて、私はソファーに身を投げた。

ボフン、と私を受け入れてくれるソファーさん。

これだから無機質な物体は好きだ。

何も言わず機能を果たし、私の愛もストレスもお構いなしに受け止めてくれる。

……しかし不思議なものだ。

あれだけ毎日見ていた夢の内容が突然変わるだなんて。

そのおかげで足の痛みも無くなった。

まあそのせいで違う種類の悪夢にうなされているのだけれど。

特に印象的なのが『車椅子』だ。

夕焼けをバックに揺れる車椅子のシルエットが、とてつもなく不吉に見える。

タバコの匂いも解せない。

私の付近でタバコを吸う人はいないし、最近のお店は殆ど全館禁煙になっている。

学校ではとくに禁煙になっているし……。

吸っている人を見かけることがあったとしても、隔離された小さな箱状の休憩所の中だけで、私が直接煙を吸うことさえ無い。

なのにも関わらず、あの夢でははつきりとタバコの臭い匂いが漂っていた。

まるですぐ近くでタバコを吸う人がいるような感じだ。

全てが謎色にしか映らない。

それでも、もう三日間同じ内容の夢を見続けている。

足の痛む夢は十年以上だから、比較するほどの日数でもないけれど、普通の人間なら同じ夢を三日も連続で見るとは考えにくい。

しかも悪夢だ、そんなことがありえるのだろうか？

——私がそういうのも変な話ではあるが。

「ふう……」

あれこれ考えていたら、なんだか疲れてきてしまった。

全身がだるくて、あれだけ冴えていた筈の精神はいつの間にか完全にくたびれてしまっている。

しかし、ああ……まだ五時にも届いていないのか。

朝日も昇ってくる気配が無い。

学校まであと三時間弱。

この飽き飽きするような時間を、どう潰そうか。

「————寝るしかないわよね、実際」

そう、寝るしかない。

テレビをつけても頭に入っていかなさそうだし、なによりこの時間帯で面白い番組がやっているとも思えない。

携帯をいじろうにも、二階に置いてきてしまっている。

今からとりに行くのも面倒だし、それで義母たちが起きてくるのはもっと面倒だ。

ここは黙って瞳を閉じよう。

幸にも、完全覚醒した神経はどうやらへばっている様相なので、頭をからっぽにしてしばらく狸寝入りを決め込めば、そのうち本当に寝られるに違いない。

私は半ば祈るような気持ちで瞳を閉じ、ソファアの上に寝転んだ。

その夢でのわたしは、決して幸せではなかった。

いつも見る夢とは明らかに違う光景に、心臓の鼓動が早くなっていくのが感じられる。

学校に行っている夢、友達と遊ぶ夢、お買い物をしている夢——  
——今まではこの全てが実際の私生活のことだったのに、今、わたしが目前にしている夢は、あれだけ憧憬を抱いた『歩く』夢だ。

わたしがずっと望んでいた、本当の夢のカタチ。

けれどこの夢には“光”が無い。

希望が無いと言ったほうがよりわかりやすいだろうか。

せつかく歩けているのに、全然楽しそうではない。

あれだけ願っていた歩行する夢は、どこか現実味があって気持ちが悪かった。

現実味があった方が、現実世界でも歩けるのではないかという希望に変換されてもいいような気がするのだけれど、とにかく夢の中のわたしは無愛想で、歩いていても全然楽しそうではなかった。

こんなもの、見ているにも全然幸せじゃない。

まだいつも見ている日常の夢の方がいくらかマシだ。

そうして——長い夢から、わたしは目覚めた。

「っ、っ、っ」

こめかみにずきり、と鈍い痛みが走った。

視界は暗く、見渡せば、まだ日光が部屋に降り注いでいない状態である。

まだ真夜中なのかなと思いつつ目覚まし時計に目をやると、四時半だった。

「ねむ……」

欠伸こそ出てこないものの、かなりの眠気が残っている。

いつもの起床時間は七時だから、これだけ早いと眠くても仕方がないと思う。

それにしても……なんて嫌な夢だったんだろう。

あれだけ焦がれていたモノが、あんなにも絶望に満ちていたなんて……。

『歩く』ということは、実はそこまで面白いものでも気持ちの良いものでもないのかな？

何せ人生で一度として歩いたことの無いわたしには、歩行の辛さなんてものはわからない。

歩くこと自体に憧れはあっても、その裏返しのことまで考えたことが無かった。

でも、どうして突然こんな夢を見たのだろうか。

もう何年も同じような夢を見てきたというのに、今日の夢はまるで違った。

念願の歩行の夢だったけれど、なんだか興醒めだし、なにより夢中のわたしのあの暗い顔が頭にこびりついて離れてくれない。

どうしてわたしはあんなにまで暗い顔をしていたのか、非常に気になる。

嫌なことでもあったのだろうか？

それにあれは正夢？

とてつもないリアリティがあったけれど……。

「……………」

まさか、だよな。

この両足があんなにも軽快に動くなんて信じられないし。  
現実味があったからと言って正夢になるなんて、科学の発展して  
現代では考えが安易過ぎるし。

これはただ、わたしの願望が夢に現れただけに過ぎない。

「寝なおそつと」

布団を被りなおして、睡眠の二ラウンドへと突入することにした。  
あと二時間は余裕で寝なおせるのだから、ちゃんと二度寝しよう。  
なんだか良くわからない夢だったけれど———おやすみ、わたし。  
また二時間後に会いましょう。

☆  
★  
☆

今日は天気もいいし、本屋さんにでも行こうかな。

／

今日はせっかくの休日なんだからどこかへ出かけよう。

☆★☆☆

予想通りというべきか、予想通りにはなって欲しくなかったと言  
うべきか。

車椅子を独りで漕ぐ少女は、苦笑いしながら人ごみの中へと溶け  
込んでいく。

今日は日曜日で、せっかく晴れたのだから、と軽い気持ちで外出  
したのがそもそも間違いだった。

こうなることは予測できたはずだったが、今日はそのことを  
すっかりと失念していたらしく、目の前に広がる事態にただ笑うし  
かなかった。

「お休みだから仕方ないか」

そう、今日は日曜日。

ちまたの学生から社会人まで、みなが等しく休みなのをうっかり  
忘れていたのだった。

中には今日も仕事だとか学校があるだとか言う人間は多少なりは  
いるだろうが、それでも総体的にはみんな休みなわけで、来栖歩の  
十全な計算は完全に狂わされた。

彼女は見た目通り、健康な人とは違う。

足が不能な来栖は車椅子を漕いでの移動となる。

人が多ければ多いほど道は狭くなり、車椅子はどうしても進みに  
くくなる。

だから彼女は普段、人ごみを避けて行動するのを基本としていた  
のだが、今日は久しぶりの快晴で心が浮き足立ってしまい、日曜日

であることさえ忘れていたのだ。

しかしここまでできてそのまま帰るのも勿体無い。

来栖歩は意を決して人ごみに紛れた。

「せま……」

街が騒がしい。

人々はみんな身勝手に、道を空けようともせずお喋りに夢中になっている。

快晴で気持ちの良かった空が、急に恨めしく感じてきてしまう。

人の熱気と太陽からの直射日光が、不快なまでに彼女の体温を上げていく。

「……っ」

がん、と車輪を蹴られた。

思わず頭を上げると、犯人はさも自分はやっていないとでも言うかのようにしらーっと通り過ぎていつてしまった。

その犯人は男で、ニット帽と耳にピアスが良く似合う、今時どこにでもいそうな若者だった。

————来栖歩が外出嫌いなものには二つの理由がある。

一つ目は移動が困難なため。

二つ目は心無い人間が多いため。

特に二つ目に関しては最近とみに酷いと、心の奥底から思う。

今の一件もそうだが、あまりにも勝手な人間が多いように思える。道端を見渡すだけでも許容出来ない事柄に溢れている。

清らかさなんてどこにもない。

あるのは利己主義な人間の群れと、時間に追われる亡者ばかりだ。こんなところにわざわざ労力を割いてまで来るのは、本当に骨が

折れる。

それでもこんなところに来るのは、気晴らしと本を買うためだ。  
家にいるのは安心だし楽だけれど、やはり息苦しい。

本は彼女にとって人生で最大の娯楽だ、無くせるわけもない。

本当はインターネットで本も注文したいのだが、やはり見ながら  
選んで買うのが格別に嬉しい。

せっかく同じお金を払うのなら、あの手に来る感動を味わいな  
がら購入したい――それらの要因から、彼女は毎週本屋に寄っ  
ていた。

「いらっしやいませー」

気の抜けた男性店員の挨拶を聞きながら、歩は目当てのコーナー  
へと車輪を滑らせた。

いつ見ても背の高い本棚には本がたくさん詰まっている。

きっとこれから一生かけても、歩にはこれだけの本は手に入れら  
れない。

そう思うだけで、この街角に生息する小さな書店も、とても立派  
に見えてくるから不思議だ。

彼女が探しているコーナーは『編み物』に関する書籍だった。

これから本格的な冬に入るので、セーターかマフラーを編もうか  
と思案中である。

今日び誰にプレゼントするわけでもなく自分で使うために編み物  
をする人は稀であろう。

それでも彼女は趣味も兼ねていたので、何の抵抗も無く毎年編み  
物をしていた。

「んー……」

ここにたどり着くまでにいくつか買おうとしていた本があったの



だが、どうやら全滅の様相だった。

仕方ないか、と肩を落とす歩。

別に本が無くとも彼女ほどの実力があれば編むのには何の問題も無い。

ただ流行や可愛いものがあつたのならそれを模倣して作ろうとしていただけ。

さほどのダメージではなかったので、落胆もそうは大きくなかった。

ただ、目当てのものが無かつたのはやはり残念なことにで、それは変わらない。

なので少しばかり気落ちした分を補おうと、歩はマンガのコーナーへと移動した。

あまりマンガの類を読む歩ではなかったが、それでも愛読書というものは、ある。

特別毎月発売されるモノをチェックしているわけでもない彼女は、こうして本屋に立ち寄っては探して回っている。

そんな面倒なことをどうして、と思う人も少なくないと思われるが、こうして本を探している時間でさえ、歩には幸福を感じる時間なのだ。

根っからの愛書精神の持ち主兼読書家——それが来栖歩の本質だった。

「あ、あつた」

ぽつりと呟いて、それを手にする。

表紙には可愛い犬の絵が書いてある。

タイトルは『ホーリードッグ』と記されており、その本を手にした歩は破顔した。

『ホーリードッグ』のあらすじは、足の不自由なコリー犬種が主

人のために奮闘する様を描いた日常モノで、彼女は足が不自由だという点を自分と重ねて読んでいた。

お気に入りの本の一つを手にした歩は気分も上々になり、次の本を探し始めようとした。

——と、その時。

「————え？」

疑問とともに、ソレに視線が釘付けになった。

「わたし……？」

☆★☆

底無しに明るい空が、ただ恨めしいと女は思った。

毎日雨では気が滅入るが、それでも晴れよりは曇天の方がありがたい。

それは女の住んでいる家庭が特殊な環境におかれていることに主な原因があった。

「あー……くそう」

秋も終わり冬がやってくるというのに、夏のように照っている太陽を睨みつつ、大きくため息をつく。

女————加瀬歩は、本当に運の無い女だった。

自分を生んだ両親の身元も顔も知らず、仮の母親はどこまでも彼

女に興味が無い。

孤児院にいた歩を引き取ってくれたのには本人も感謝しているが、どうせ育てる気が無いのだったら引き取ってなど欲しくはなかった。もはや済んでしまった話なので、ここで喚いてもどうにもならないことくらい、彼女も承知の上だった。

だからこそ木の葉のように生きようと、そう決めていた。けれどそれもどうやらこの性格では無理なようで、義母に反抗してばかりだった。

そんな荒れた精神を、何とかしようと思いつたのが『本』の存在である。

本来、歩はマンガ以外の本は大のつくほどに苦手だった。教科書然り、参考書然り。

雑誌もまとまりがなくて嫌いだったし、ニュースの載っている本はどこもやらせのように思えて嫌いだった。

だから彼女が自分から進んで買う本はマンガだけ。

他のものには手も出そうとしない。

それがつい最近までの話。

心変わりが発生したのは、実は一週間前のことだった。

嫌いな国語の時間中、教科書を何となしにペラペラと捲っていた時のこと。

一つの挿絵が彼女の手を止めさせた。

そのページは車椅子に乗った少女が描かれており、淡いペンタツチが印象的だったのを鮮明に覚えている。

車椅子の上で泣きじゃくる女の子の絵。

たったそれだけの、なんの変哲も無い一ページだけの挿絵に、歩はいとも簡単に心を奪われてしまった。

数ページ戻って題目を確認すると『車椅子の上のカナリヤ』と書かれていた。

なるほど、題目のページの小さな挿絵には、車椅子に座っているのは少女の代わりに小鳥が描かれている。

これがカナリヤなのだろう。

何故かそれだけの作品が、とてつもなく気になってしまう。

その事情から、彼女は近々本屋に行こうと決めていたのだった。

それにしてもこの人ごみは酷いものだ、と歩は呆れ果てた。

目の前には人、人、ひとひと――！

怒りを堪えつつ、当初の目的地へと急ぐ。

早くこの人間ジャングルから抜け出さないと、このデリケートな脳がやられてしまうと悪態をつきながら。

そうして十五分後、ようやく目的地だった本屋につくと、歩はまたしても盛大なため息をついた。

どうして休日だと言うだけでこんなにも人が多いのだろう、と考  
えつつ。

本当ならボーリングとか身体を動かせる場所に行ってストレスを  
解消したいのだが、本屋はもう目前。

今更引き返すなど、どうして出来ようか。

歩はあまり行く頻度の無い本屋へと、一歩足を踏み込んだ。

「いらっしやいませー」

やる気の無い店員の対応。

イライラを募らせながらもここまで来たというのに、あからさま  
に適当な対応をされるとは思ってみも無かった。

しかしここで怒りを爆発させたところで、敵になるのは自分一人  
なのは火を見るより明らかだ。

なにせ本屋さんや図書館では『静かにすること』が暗黙のルール

なのだから。

騒いでしまったら負け……………歩はぐっと堪えて奥へと歩を進めた。

「……………」

目的のコーナーに辿り着いた歩は、もう今日何度目になるかわからないため息をつくことになった。

ここに来るまでに相当な人ごみを体験したというのに、まさか本屋に来てまで再現されるとは。

開いた口がふさがらない。

どうして小説コーナーにこんなにも人間が群がっているのか、歩には理解出来なかった。

小説なんて文字ばかりで楽しくない、というのが彼女の持論だ。だからこそ今日までこのコーナーには近寄りもしなかったというのに。

今日だって挿絵が気になったから興味本位で来たというのに、この仕打ちは何だ。

これではまるで、加瀬歩に小説など似合わないと言われてるようなものではないか。

「あっそう」

噴出する怒りを、静かに放ったその一言に乗せて、歩はコーナーから退場した。

顔は鬼のような形相で、近くにいた背広を着た中年のオジサンはその彼女の気迫に圧されてつい道を譲った。

そうしてズンズン進んでいく歩。

そのままだこへ行くのかと思えば、着いたのはマンガのコーナーだった。

「マンガだけ読んでればいいってことでしょ」

あくまで小声で、けれど語気は強めにそんなことを言う。眼前に広がるマンガの本たち。

その先に、歩は何か良くないモノを見た気がした。

「……ん？」

気になって一步を踏み出す。

自分の身長より低い、そのナニか。

ソイツが手にしているマンガは、実は歩も収集しているモノだった。

違う点があるとすればそれは、歩はもうその巻数を持っていることだ。

そうして加瀬歩が小さな人間の顔を確認しようと見下ろした瞬間、目を剥いて驚いた。

「私……？」

☆★☆☆

異常は速やかに、そして徹底的に発現した。

「い、や」

「なん、で」

お互いを確認しあった瞬間のことだった。

アユムと呼ばれた足の不自由な少女は、さも不自由などどこにも無いと言わんばかりに立ち上がり、見下ろしていた女の首を掴んで絞め始めた。

アユミと呼ばれた足にコンプレックスを持つ少女は、車椅子に乗った人の顔を見下ろしていた状態から、そのまま立ち上がってきた少女の首をめがけて両手を突き出した。

「ぎ……っ、ぐく、っ」

「あ——い、た……っ」

お互いがお互いの首を絞めると言う構図は、周囲の人々にその異常性と恐怖とを撒き散らした。

絶叫する女の声。

止めに入ろうとする男の声。

けれどアユミとアユムの二人には、もはやそれらの声は届いていない。

「ふ——う、あ」

「しん、てええええ……っ！」

ガシャン、と車椅子が倒れる。

二人は鬼気迫る形相のまま首から手を離そうともしない。  
やがてもつれ合いながら床に倒れこんだ。  
それでもまだ、二人は止まらなかった。

「おい、警察だ。誰か警察呼べ!!」

ドスの聞いた声が周りに響く。

けれども、その声を聞いて動いた人間は誰一人としていなかった。

「ひゅ——っ、ひゅ——っ」

気管から空気の抜ける音が聞こえてくると、いよいよ終盤を思わせた。

ギャラリ―たちは魅入って動かない。

まるでその様は、古に催されたとして名高い、かのコロッセウムを思わせる光景だった。

殺し合いをする人間を見て楽しむ闘技場。

ここはその縮図だ。

殺しあう二人を見て、助けにも入らず、ただ事の顛末を見守っている。

それは恐怖で腰が抜けたとか、異常なモノを見て金縛りにあっているとか、そんな大それたものではない。

ただこのギャラリ―たちは、二人の殺し合いを『娯楽』として捉えている。

「いいぞ……」

誰かがそんなことを囁いた。

それこそがまさに動かぬ証拠だ。

この異常な光景を、やつ等は『楽しい』と思っている。

ぞくぞくと背を這ってくる快楽の信号。

それを感じ取った彼らは、次第にみんな笑顔になっていく。

「あ——が」

「が、ヒィ」

ごきん、と金属が折れ曲がった音が木霊した。



それは終焉の音。

今度こそ、周囲は完全に沈黙した。

血走らせていた眼も完全に通常の状態に戻り、息遣いも正常に戻りつつある。

それはなにも目の前に転がる死体二つに同情したからではない。ただただ、異常の宴が終わってしまった——その虚無感からである。

あんなにも輝かしい時間が、いつもの退屈な日々に侵食されていく。

彼らが悲しんでいるとすれば、その一点のみだった。

そうして五分と経たないうちに、人々は動き始めた。

ある者は、自分には関係ないと立ち去っていった。

ある者は、早く救急車をと、今更ながらに正当を振りかざしていた。

ある者は、嫌なモノを見たと、忌み嫌うように逃げていった。

残された二つの遺体と、一つの車椅子。

車椅子の座部には、何も乗ってはいない。

少女も、カナリヤも。

☆★☆☆

「これが事の顛末です」

「ほう、日本ではあまり症例が聞かされていなかったが……これはまた珍しいな」

「はい。しかしてこれもドッペルゲンガーかと」  
「それもそうだな」

静かな湖畔に視線を泳がせる白髪交じりの男には、初老を思わせ  
ていておいて、いまだ威厳のようなものが感じて取れた。

緑と青の景色を眺める姿はなかなか様になっており、口には葉巻  
が咥えられている。

反して報告者は、身長が百六十センチにも満たないような小柄な  
男で、三十代前半といった感じだ。

この二人が話し合っているのは、つい先日、日本で起きたドッペ  
ルゲンガーの事例だった。

通常、ドッペルゲンガーは相手に物的な危害を与えない、霊的な  
現象だといわれている。

しかし今回の事件は、完全に肉体を持った実体がお互いを攻撃し、  
死に至らしめたというのだ。

これは世界的に見ても例を見ない、大変珍しいケースだと言える。  
だからこそ、二人は好奇心に囚われていた。

「それで、二人の特徴は？」

「はい。どちらもまだ高校生で、性別は女子だそうです。一人は加  
瀬歩といい、毎朝のように両足に激痛を覚えていたとか」

「毎朝——激痛？」

「そうです。毎朝決まった夢を見た上に、両足がちぎれるような痛  
みに襲われていたらしいです」

「ふむ」

「そしてもう一人は来栖歩。こちらは両足が不自由で、車椅子で生  
活をしていたとか。それから二人の名前は、アユミとアユムで酷似  
しています」

「ほう、魂の分離か。どうやらそれがトリガーだな」

「はい。恐らく半身を求めて襲い掛かったのでしょう。実に哀れなことです」

言って、本当に残念そうな声で言葉を結んだ。

「ドッペルゲンガーは基本、幽体の自分自身を認識してしまうことで死に至る。

しかし今回の件は、魂が別離したはいが、長い時間各々の意思と感情で生活をしてきたところで相手の存在を認めてしまったがために、魂同士が足りない部分を埋めようとしたのだろうな。

本来の自分へと帰るために」

「そうでしょうね。自分が失くしたモノが見つかったのだから、取り戻すのが順当だと思います」

「うむ。……それでは報告書をまとめておいてくれたまえ。明日の会合までに、な」

「日本での被害報告会ですね？ 了解です、頭目」

「はは、今頃日本の警察機構、それに医療機構も慌てふためいているだろうな」

葉巻を灰皿に押し付けて、初老の男性は大きく息を吐いた。

その顔は満ち足りたものであり、娯楽を楽しんだ後のような笑顔である。

「さて、と。私も会いに行くのでしょうか。——ソイツに」

豪快な笑い声を残して、男性は絢爛な造りの部屋を出て行った。

《了》

## (後書き)

初めての投稿になります、夢月みぞれです。

物書き目指して研鑽の日々を送っています。

この小説は十年ほどまえに自分で書いたものですが、懐かしさもあり投稿しました。

至らない点も沢山あるとは思いますが、これから頑張っていきたいと思いますので、

どうぞよろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4516/>

---

ドッペルゲンガー

2010年12月30日23時21分発行